特集

函館での本にまつわるさまざまな取組み

「本」をチカラに変える。

●ブックシェアリング函館〜ほんのおくりもの

●世界に一冊だけの本・展

●図書館ボランティア

●函館きつつき点訳奉仕団

●被災地の子どもを応援する会　ほんわか

●工藤亮佑君&北海道教育大学函館校

●アザレア前線

●銀のふね

●ぱしと―Pasito―

子どもたちがもっと本に触れる機会を

●ブックシェアリング函館〜ほんのおくりもの

「活字離れで本が売れない」「若者が本を読まなくなった」、そんな話がささやかれ始めたのは1990年代後半のことだが、そんな状況だからこそ、子どもたちが読書の楽しさに出会う場として、学校の図書室や地域の図書館は重要な役割を担っているのかも知れない。

しかし北海道は他の地域に比べ土地が広大で、学校や図書館が点在していることもあり、日頃から十分に本と触れ合うことができない子どもの存在が問題視されている。蔵書数や人員、他の図書館との連携など、自治体をはじめ関心を寄せる市民も参加し、読書環境の充実をめざす取組みも始まっている。「北海道ブックシェアリング」もそんな状況を改善すべく動き出した市民の活動だ。読み終えた本を一般家庭や企業などから回収、整理し、道内の小中学校や保育所、子育てセンターなどの図書施設に無償で提供するほか、2011年からは東日本大震災の被災地に対する支援も行っている。

函館市内で『函館圏フリースクール すまいる』を運営している庄司証さんがこの『ブックシェアリング』という函館では耳慣れない活動を始めたきっかけは、小学校の頃にお世話になった恩師からの提案だった。そして2013年、一般財団法人北海道国際交流センター（HIF）

イベント会場でのひとコマ。子どもたちは真剣にお気に入りの一冊を探す。

の協力も得て、『ブックシェアリング函館～ほんのおくりもの』をスタートした。

その活動内容は週に2回ほど。函館市元町にあるＨＩＦの一室で行う『集められた本の仕分けやクリーニング』という地道な作業だ。一回の活動は2時間ほど、一人が10冊程度の本を担当する。シールがべったりと貼り付いていたり、消すのが困難な書き込みがあったりと、そのコンディションはさまざまだ。読み手のことを考え、出来る限りきれいな状態にしようと、庄司さんらの作業にも力が入る。

現在は児童書、絵本だけの取り扱いだが、随時８００冊ほどの本をストックしている。主に廃校になった学校の図書室からの寄付が多いが、思い入れのある本を捨てたり売ったりすることができず、再利用を希望する市民から持ち込まれるケースも多い。

「中には、あちらこちら破けていたり、汚れがひどかったりという、処分に困って…?と思われるものもあります。持ち込まれた本のうち利用できるものは6割程度。それでもこちらは“常識の範囲”で、とお願いするしかないんですが…。例えばこれは自分の知人に渡せるだろうか、みたいなことを基準に考えて欲しいんですけどね」と庄司さん。

クリーニングされた本は、地域のイベントなどにブースを設け、来場者に持ち帰ってもらったり、問い合せのあった希望者に渡したりということもしているが、『学校の学級文庫に定期的に配本できるネットワーク作り』が最終目標だ。

自身も小さな男の子の父である庄司さん。

「この活動を20年、30年続けるためには、地域の理解が不可欠です。今はまだ人手も足りませんし、課題はたくさんあります。ただ、子どもたちが本に触れる機会がもっと増えて、『こんな本が読みたい、あんな本も読みたい』というニーズが届くようになったら、私たちの努力も報われます」

集められた本はジャンル分けされ書棚に大切に保管されている。

特集

「本」をチカラに変える。

問合せ先／
「ブックシェアリング函館～ほんのおくりもの」事務局
函館市大手町9-13　函館圏フリースクールすまいる内
TEL:080-4349-6463

手作りの本を集めたユニークな展覧会

●世界に一冊だけの本・展

今年で10回目を迎える『世界に一冊だけの本・展』。毎年秋になると、この手作りの本を集めたユニークな展覧会を楽しみにしている市民も多い。

出品の条件は、仕上がりがＡ2のサイズ以内で、印刷所や製本所に依頼したものではなく作者が自分の手で『綴じている』こと。出品料はとらない。絵や写真、小説やエッセイ…、ジャンルは自由だ。職業や年齢の制限もないので、小さな子ども（この場合は家族の手伝いもＯＫ）や高齢の方まで、出品者の年齢層が幅広いのもこの展覧会の大きな特徴だ。また、デザイナーやカメラマンなどプロの参加者もいるが特別扱いはしない。どの作品も五十音順に公平に並べる。

「絵や写真の公募展は敷居が高いし、個展を開くなんて夢のまた夢。でも何かを表現したい、自分の作品を誰かに見てもらいたい。そう考えている人って多いと思いますよ。それが子どものために作った絵本だったり、おばあちゃんが趣味ではじめた絵手紙だったり…」そう語るのはこの展覧会の発案者である中村ひでのりさん。20年間、東京で編集の仕事に携わってきた経験を活かし、本の構成の仕方や簡単な製本の講習会を何度も開き、２００５年の秋、当時ＦＭいるかの建物にあったギャラリーでの開催にこぎ着けた。

１枚の絵や写真で表現できな

出品者とともに来場者の年齢層も幅広いのがこの展覧会のおもしろさ。

くても、本という体裁をとることで「自分にもできるかも」と考える。たしかにそれはわからなくもない。

「それでも最初は30作品ぐらい集まればいいかなと思っていたんです。それが100件を越える出品があって、びっくりしました」と中村さん。驚いたのはその数だけではなく、作品のクオリティの高さだった。「友人のデザイナーに声をかけて、出品してもらったんですが、その作品の隣に置かれた、普通の主婦が作った我が子の成長日記の方が、ずっと魅力的だったんです。友人には言えませんが（笑）」布や金属で作ったもの、小指の先ほどの豆本やポップアップ絵本、木箱に入れられた本など、アイディアも多種多様でワクワクするような展覧会になった。今では毎回出品を楽しみに作品作りに励む常連もたくさんいる。中にはこの展覧会に出品したことがきっかけとなり、他の展覧会で優秀賞となって印刷製本されたり、また、大手の出版社から出版されたケースもあった。

子どもも時間を忘れて真剣に作品に見入る。

第3回からは、市内で手作り絵本の教室などを主催することがめいづるさんに運営を引き継ぎ、会場も末広町の函館市地域交流まちづくりセンターとなった。回を追うごとに出品数も増え、昨年は200作品を越えた。

「正直言ってこんなに続くとは思ってもいませんでしたが、これからもおおぜいの方たちの『ちょっとだけ気軽な発表の場』であり続けたいですね」

今年の開催は11月19日より。8年ぶりに中村さんも実行委員として運営に関わるという。

折りたたみだったり飛び出したり、中には写真上のようなユニークで手の込んだものも。

第10回記念展の実行委員代表の中村さん。

世界に一冊だけの本・展
［第10回記念展］

日時／平成27年11月19日（木）
～26日（木）10時～17時
※最終日は14時まで。15時より交流会
場所／函館市地域交流まちづくりセンター
問合せ先／
「世界に一冊だけの本・展実行委員会」
☎0138-22-6167（SUQ+）
E-Mail/leaves-x@sea.plala.or.jp（中村）

特集

「本」をチカラに変える。

図書館ボランティアが作る色とりどりの布絵本

●図書館ボランティア

机いっぱいに広げた布の上に色とりどりの動物や魚をひとつひとつていねいに縫い合わせてゆく。

中央図書館で行われている「布絵本」の製作にあたる図書館ボランティアのメンバーたちは、月曜日と日曜日それぞれ月2回、賑やかに作業をする。「最近、どこのランチがおいしかったよ」などと、話も弾みながら手際よく作業は進められ、絵本はどんどん出来上がってゆく。曜日を分けて活動するのは、平日は無理でも日曜日なら、というメンバーもいるからだ。

図書館ボランティアといっても、その活動はさまざま。資料の整備や図書館で行われる映画上映会の補助、読み聞かせ等の他、施設内の花壇の整備なども行う。メンバーはみんな図書館で開かれる「ボランティア養成講座」を受講し、図書館ボランティアと認められた人たちだ。その中で布絵本を担当するメンバーは現在26名。この活動が始まった2006年から、今までに製作した布絵本は80冊を超えた。作品は図書館の児童ふれあいコーナーに置かれ、子どもたちは目を輝かせてページを開く。

作業手順はこうだ。たくさんの資料を参考に絵をトレースする。それを、例えば動物であれば、それぞれの大きさの比率などを考えながら、縮小・拡大をしコピーする。そうやってでき

「柔らかなウールの感触が、子どもたちの感性を育んでいくんです」と弦木さんは語る。

た型紙に合わせてフェルトを切りパーツを作る。それをレイアウトに気を配りながら縫い合わせ、本の体裁にしていく。もちろん、子どもたちに気に入ってもらえるようカラーバランスにも気を使う。

企画や指導に当たっているのは、絵本読み聞かせグループ「マシュマロ」の代表であり、函館市子育てアドバイザーの認定者である弦木恵美子さん。製作にあたっては、図書館担当者や他のメンバーたちと、どんな感じの絵本にしようか、どんな仕掛けを作ろうかと打ち合わせを重ねる。20年間、マシュマロで活動する経験の他、洋裁の資格も持っているという弦木さんだからできることも多い。

数ページの小さなものから、森の動物や、海の生きものなどを題材にした数十ページに渡る大作もある。内容もボタンのかけ方やファスナーの閉め方、紐の結び方などを子どもが学べる知育絵本や、本を裏返して「神経衰弱」ができたり、本の中の魚を釣ることができるといった仕掛け絵本も面白い。そうやって工夫を凝らした自分たちの作品で、子どもたちが楽しそうに遊んでいる姿を見ることが、スタッフたちの喜びだ。

絵のパーツが取り外せるものや、袋状になっているもの等…、弦木さんたちの作る本にはさまざまな楽しい工夫がある。

大作だと出来上がるまでに3カ月以上かかることもある。だがそうやって苦労して作ったものは、出来上がった時の喜びも大きいと弦木さん。色とりどりの布絵本には、彼女たち図書館ボランティアの愛情がいっぱいつまっている。

ひと針ひと針、子どもたちの喜ぶ顔を思いながら、根気のいる作業が続く。

ボランティアメンバーの中心となって活動する弦木恵美子さん。

問合せ先／
「函館市中央図書館」
函館市五稜郭町26-1　☎0138-35-5500

きつつきのごとく コツコツと。読書の感動を多くの人に

●函館きつつき点訳奉仕団

点字（てんじ）とは、視覚障害者が紙の上の盛り上がった点を指先の触覚により読み取る文字のこと。そして一般の活字を点字に翻訳する作業を点訳という。それは、点字専用の用紙に6つの点を組み合わせて丁寧に打ち込みをしてゆくというもの。点の位置や数が一つでも変われば音が変わってしまうので、気が抜けない。以前は人の手でひと文字ずつという気の遠くなる作業だったが、最近はパソコンに文字を入力し、それを専用の機械で出力するのが主流になってきた。それでも根気のいることに変わりはない。

そんな点訳をボランティアグループとして長い間続けてきた「函館きつつき点訳奉仕団」。その現在の代表が松尾悦子さんだ。1994年に点訳の講習を受けて以来、視覚障害者の人たちに一冊でも多くの本を届けたいと、函館視覚障害者図書館を構成する一団体として活動している。会員は現在42名。毎週火曜日に、函館市総合福祉センター「あいよる21」の一室が「きつつき」の活動の場だ。集まったメンバーはやはり本好きな人が多く、歴史もの、推理ものから純文学と好みもさまざま。主に好みの本を楽しみながら点訳するが、関心の薄かったジャンルの作品も点訳や校正をすることで興味が湧いてくることが多い。一冊の点訳本の完成には半年ほどかかるが、思いもそれだけ強くなる。

日本には「サピエ図書館」という「視覚障害者情報総合ネットワーク」があり、製作した本はこのサピエ図書館に登録され、全国の読者が利用している。サピエ図書館は全国のボランティアが同じ本を作るという無駄を省くことにも大変役立っている。

「きつつき」の点訳した本によって、多くの感動が伝えられれば、と語る松尾さん。2017年には、「函館きつつき点訳奉仕団」の創立50周年を迎える。その記念として「少年少女世界名作の森」ほか29冊を点訳する企画も始まっている。長い時間のかかる作業だが、2年後の完成を楽しみにメンバー一丸となって進めている。

代表の松尾さん（右）とスタッフの大石さん

問合せ先／
函館視覚障害者図書館
「函館きつつき点訳奉仕団」
☎0138-23-2580

特集
「本」をチカラに変える。